

**漢字は三歳の幼児にも覚えられると言うが、そんな幼児に漢字を教えたら、変な頭になる心配はないか。**

石井方式では「漢字を教えようと思うな。漢字で教えているのにすぎないのだと思え」ということを、指導に当たる場合の注意にしています。

幼児には、文字どおり、漢字を見せるだけでよいのです。見せて、その結果、幼児が漢字を覚えようと覚えまいと、そんなことは学習の目的ではないのだから、問題にしない、という態度です。

今までたびたび述べていますように、話をしながら、その話の中に出てくる大切な言葉を、漢字で書いて見せると、子供たちはそれに関心をもって見ていますので、その漢字が何と読み、何を意味する文字であるかを、ひとりで理解し、頭に刻みつけてしまうのです。

幼児は、関心をもって見るものは、すべて大脳皮質にはっきりと記録してしまいます。この時の、幼児の能力は、まことに驚嘆すべきものがあって、全く無造作に、何の苦もなしに覚えてしまいます。

おそらく、「漢字を覚えてやろう」などという、特別の改まった気持な

どなくて、全く無努力、無負担で覚えられるのだと思います。それが、幼児期の子供の、漢字の覚え方の特徴です。幼児だけに与えられた、ありがたい能力ではありませんか。

こういう学習によって、幼児の頭の働きが良くなることこそ考えられますが、頭が変になるということは、考えることができません。そういう心配は頭を小さい容器のように考えて、小さい容器に、物をいっぱい詰め込んでこわれはしないかと思うのではないのでしょうか。

人間の脳は、幼児の時からすでに成人の神経細胞の数だけ用意されていて、しかも成人と同じに成熟しているのですから、決して心配することはありません。とりわけ、機械的に記憶する能力にかけでは、おとななどとても及ばないほどの強い能力をもっているのです。心配することは全くありません。